

「子どもにとっての古典学習」

牧野智治*

Studying Classical Works of Literature for Students

Tomoharu Makino

1992.11.30 受理

キーワード：子供にとって、古典学習、連続と断絶

はじめに

この小論では、「子どもの側に立つ」という視点に立った古典の授業の一方策を、「盛親僧都の話」（『徒然草』第六十段 兼行法師 注1）を教材とした授業実践で述べていく。*

第一節では、「子どもにとっての古典学習」という主題設定の理由と、授業実践化の方向について述べる。第二節では、「盛親僧都」という教材文の特色およびその選定の意図について述べる。第三節では、授業計画と計画段階での指導上の留意点について述べる。第四節では授業実践の実際を紹介する。第五節では、授業後の生徒の感想の分析とその考察を試みる。

一 「子どもにとっての古典学習」主題設定の理由

1 主題設定の理由（注1）

① 古典というもののとらえ方

「古典」と一口にいってもそのジャンルや作品は多岐にわたっている。しかし、それらはすべて「世代を大きく隔てた過去のものである」という点で共通している。そこで、あえて現代から見た「古典」の特質を一言でいうとすれば、「〈断絶〉と〈連続〉の両面性を持ったもの」といえるだろう。例えば、〈現代とは全くかけ離れたような時代の状況〉と〈現代とも相通ずるような状況〉という「状況のレベル」、また、〈現代では死語となってしまうような言葉〉と〈現代でも使われ続けているような言葉〉といったような「表現のレベル」など、様々なレベルにおいて〈断絶〉と〈連続〉の二面性を見ることができるよう思う。

② 子ども像のとらえ方

「最近の子どもの感性は涸れてきている」「最近の子どもはやる気がない」といった言

*山口大学教育学部附属山口中学校

葉をよく耳にする。しかし、いったん対象（教材）に対峙した子どもたちは、こちらが驚かされるほどの豊かな感性や鋭い認識を発揮してくる。また、学習の仕方について子どもたちに尋ねると、必ずといっていいほど「自分たちの力でやってみたい」という内容の答が返ってくる。彼らは自分自身の力で対象（教材）と対峙したがっており、そこから「難しさ」を見つけそれに意義を見いだしたときには、「難しいから頑張る」というような意欲を発揮してくる。そしてさらには、自分の得たものを仲間と話し合う中で、確認したり高めたりひろげたりしようとする意欲をも示すものだと思う。

探求心・好奇心といった古来からいわれてきた子どもたち本来の特性は、現代においても少しも変わっていないと私には思える。問題は、現代においてはそれらの特性が十分に発揮されていないというところにあるように思われる。例えば、子どもたちは自分自身が持っている豊かな感性に気づけないでいたり、言葉で表現できないでいたり、気づかせないような状況に甘んじていたりする。そのような状態であることを「涸れている」ととらえられているだけではないのだろうか。

③ 子どもにとっての古典学習

①で述べたように特質を持つ「古典」という教材を、子どもたちはどのように見ているのだろうか。担当する三年生に「古典」についてのアンケート調査をしてみたところ、「古典」の学習に対して、普通かそれ以上の興味があると応えた生徒が約8割もいた。これには少なからず驚かされた。しかし、「難しいから頑張る」という子ども本来の特性からすれば〈断絶〉という面を持つ「古典」の抵抗を、彼らはむしろ興味の対象としてとらえているのではないかと考えられた。もちろん〈連続〉している面を見いだすことのこの喜びも、彼らが「古典」の学習に興味を示すことの大きな要因になっているに違いないだろう。だとすれば、「古典」という教材は子どもたちにとって「発見の宝庫」としてとらえられているという見方も成り立つだろう。

教材としての「古典」をこのようにとらえて授業を設計したときの、子どもたちの教材へのかかわり方、そして見いだすであろう学習の意義、それらを具体的に探りたいと考えている。そうすることが子どもたち本来の力を発揮させ、さらには彼ら自身がその力を磨いていくことにもつながるのではないかと思うからである。

2 実践化の方向

前項でもふれたアンケート調査の中で、既習の「古典」教材に対する子どもたちの感想を見たとき、目についたことが二つあった。

ひとつは、1年生教材に対する感想は、話の内容に関するものがほとんどであるが、2年のそれでは内容に関するものと表現や韻律に関するものが、ほぼ半々になっていうことであった。その原因としては、教材文における古文の分量の違いということと、学年が進むにしたがって表現に対する目が肥えてきていることの二つが考えられるように思えた。そこで、3年生を対象として、ほぼ原文に近いものを表現に注目させていくような方法で提示したいと考えた。そこから、子どもたちの〈断絶〉と〈連続〉へのかかわり方を、「表現」という具体的なレベルで探りたいと思ったからである。

ふたつめは、内容を具体的に記さないまま、単に「面白かった」という言葉でくくった感想が多かったことである。抽象的な言葉の背後には必ず具体的な何かがあるはずである。にもかかわらず、「面白さ」の身元が語られないまま感想が書かれていたことに不

安をおぼえた。

そこで、授業の中に子どもたちがとらえた「面白さ」の身元を語らせる場面を設定してみたいと考えた。そうすることによって、「古典」教材に対する、子どもたちの具体的なかかわり方が（言い換えれば、彼らの感性や認識のありようが）、より鮮明な形で引き出せるのではないかと考えたからである。また、子どもたち自身がそれに気づくことが、自分たちの手で自身の感性や認識を磨くことにつながり、彼らにとっての「古典」学習の意義をとらえていくことにもなると考えたからである。

二 教材の特色および選定の意図

1 「徒然草」第六十段の梗概

安良岡康作氏は「徒然草」第六十段を次のようにとらえておられる。

盛親僧都の、特異な、すぐれた個人的人間像を描いた段として傑出している表現である。三段落のうち、第一は、他人に食わせず、自分だけ芋頭を食べぬいた彼を、第二では、気の向くままに、ある法師にあだ名した彼を、第三では、人に従わず万事自由に振る舞って、しかも人々に許された彼を叙し、結局、徹底した自由境を実現した盛親の非凡さで全体を統一している。

「徳のいたれりけるにや」と感想を付しているのは、盛親の自由境が単なるわがままでなく、その人格的精進の到達したところに展開した、超常識的な個人的絶対性に貫かれていることを兼好が直感したためである。（注2）

教材原文

真乗院に盛親僧都とて、やんごとなき智者ありけり。芋頭といふ物を好みて、多く食ひけり。談義の座にても、大きな鉢にうづたく盛りて、膝もとに置きつつ、食ひながら文をも読みけり。患ふことあるには、七日、二七日などなど、療治とて籠り居て、思ふやうによき芋頭をえらびて、ことに多く食ひて、万の病をいやしけり。人に食はする事なし。ただひとりのみぞ食ひける。きはめて貧しかりけるに、師匠、死にさまに、錢二百貫と坊ひとつをゆづりたりけるを、坊を百貫にうりて、彼是三万疋を芋頭の錢とさだめて、京なる人にあづけおきて、十貫づつとりよせて、芋頭を乏しからず召しけるほどに、又、異用に用ゐることなくて、その錢みなに成りにけり。「三百貫の物を貧しき身にまうけて、かくはからひける、誠に有難き道心者なり」とぞ、人申しける。

この僧都、ある法師を見て、しろうるりといふ名をつけたりけり。「とは、何物ぞ」と、人の問ひければ、「さる物を我も知らず。若しあらましかば、この僧の顔に似てん」とぞ言ひける。

この僧都、みめよく、力強く、大食にて、能書・学匠・弁説、人にすぐれて、宗の法灯なれば、寺中にも重く思はれたりけれども、世をかるく思ひたる曲者にて、よろづ自由にして、大方人に従ふといふ事なし。出仕して饗膳などにつく時も、皆人の前据ゐねれば、やがてひとりうち食ひて、帰りたければ、ひとりつい立ちて行きけり。斎・非時も人にひとしく定めて食はず、我が食ひたき時、夜中にも暁にても食ひて、ねぶたければ昼もかけこもりて、いかなる大事あれども、人の言ふこと聞き入れず。目覚めぬれば幾夜もいねず、心を澄ましてうそぶきありきなど、尋常ならぬさまなれども、人に厭はれず、よろづ許されけり。徳のいたれりけるにや。（注3）

2 教材選定の意図

(1) 教材としての第六十段の内容

教材という観点から、この話を私なりにとらえたとすると、次のようになる。

この話は、一見して面白く、内容もあまり難しいようには見えない。しかし、よく読んでみると、この話の面白さには様々なレベルがある。

表現（言い回し）のレベルで言えば、盛親僧都の言動の中の一箇所だけ尊敬表現を使っている（「芋頭を乏しからず召しけるほどに」）ことや、「人には食はすることなし」と言えば、自分だけが食べていたことは分かるのに、わざわざその後「ただひとりのみぞ食ひける。」とたたみかけて述べていることなどが挙げられる。

また、事柄のレベルでは、それぞれの段落で取り上げられている僧都の言動のひとつひとつが、実にユニークで面白い。

さらに読み進めていくと、そのような僧都に対する世の人々の評価も、現代の常識からはかけ離れていて興味深い。

そして、話の最後で述べられる兼好のコメントの意味するところには、非常に深いものがある。仏者と世俗の間に身を置いた兼好なればこそその表現だと言っていいだろう。

まとめて言えば、兼好はユニークで型破りな僧都の言動を、ユーモアをたたえた筆致で描き出している。そして、そのような僧都を嫌わずに許し、さらに「誠に有難き道心者なり」とまで評価する人々の姿から、僧都の自由闊達さの源を「徳のいたれりけるにや」ととらえている。ここで兼好は、世の人々の無意識の評価を、彼独特の鋭さで言葉にしてみせているといえるだろう。

ここには、僧都のカラッとした天真爛漫な生き方（それを支えているのは「仏道」への精進による僧都の「徳」なのである）がまかりとおるような世界が見られる。それらは現代では忘れかけられているか、あまり省みられない類の日本人の精神風土なのではなかろうか。

このように、この話は、一見面白くかつ難しくはないように見えるが、読み込んでいくとその奥は意外に深い。そして、その根底のところ、現代とのある種の断絶をも垣間見させてくれる話だと言えよう。

(2) 生徒の実態の考察

現代生活において、規則と規制の中で生きている子ども達は、それらから「自由」でありたいという思いを強く持っている。しかし、この場合の「自由」は、「逃避」という言葉と背中合わせの関係になっていることが多いように思える。

また、規則や規制から解放されたいと思っているにしても、それぞれに十五年近く生活してきているわけであるから、子ども達自身のなかには、ある種のアイデンティティがそれぞれに形成されており、自分なりの自己規制の枠を持っているように思う。ただ、それについてあまり自覚的ではないように思える。

つまり、子ども達は「自由」の実態というものに対して、まだあまり自覚的ではないと言えよう。

(3) 教材選定の意図

教材としての前述のような内容を持つと考えられるこの話に、子ども達はどのような出会

い方をするだろうか。

様々なレベルでの面白さを持つ話であるから、それぞれにこの話を楽しみ興味を持つものと思われる。そして、殆どの子供は、僧都の桁外れの自由さに、ある種のショックを受けるように思う。

なぜなら、道心による精進によって支えられている僧都の「自由」と子ども達の「自由」、そして、僧都の生き方がまかり通った時代と子ども達が生きている現代という時代、それらの間のある種のズレを、言い換えれば「断絶」を感じとってしまうと思うからである。

それは、最初の段階では「そこまでは認められない」という僧都への反感の形で表れる場合もあるだろうし、「我が意を得たり」という好感の形で表れる場合もあるだろう。

この好感なり反感なりの身元を尋ねていけば、言い換えれば、子ども達が最初を感じるであろう「ショック」の源を、子ども達自身が自分なりに明らかにしていく場面を設定すれば（或はそのような教師の援助がなくても）、僧都の言動を許し、さらに尊敬までする世の人々と、「徳のいたれるけるにや」と最高の賛辞を送る兼好へも、子ども達の目は届き得るに違いない。その過程で、またはその結果として、子ども達は自分自身の中の「自由」や自分の生活（自分が生きている時代）といったものにまで、目を向けていくのではないかと思われる。

そうすることで、子ども達は自分なりに「自分にとっての古典学習」というものを見いだしていくのではないかと考えた。これが、この話を教材として選んだ所以である。

三 授業計画と指導上の留意点

1 授業の目標

この話に対する印象の身元を自分なりに明らかにしていくことで、読みを深めていき、盛親僧都の生き方やそれがまかりとおった時代というものにたいして、自分なりの感想を持てるようにする。

2 授業計画の概略

- | | |
|--------------|------------|
| (1) 対象 | 第三学年 |
| (2) 教材 | 「徒然草」 第六十段 |
| (3) 指導に要する時間 | 4～5時間 |
| (4) 授業構成 | |

- 第1次 この話と子ども達との出会い方を探る。
- 第2次 切り込み口を探る。（学習の方向、学習課題の設定）
- 第3次 課題にもとづいて読みを深めさせる。
- 第4次 それぞれの印象の身元を語り合わせる。
- 第5次 読後感想を書かせる。

3 指導上の留意点

(1) 授業全体を通しての指導上の留意点

- ① 子どものペースに合わせた授業にしていくこと。
（子どもの反応に柔軟に対応していくこと。）
- ② 語句の抵抗が少なくなるように教材の提示の仕方を工夫すること。
- ③ 毎時間必ず音読を一回以上入れること。（文章全体を意識させるために）

(2) 各次における指導上の留意点

第1次 [音読と感想メモ]

- ① おおまかに第一印象を聞くというかたちにして、細かいことにはこだわらないようにすること。
- ② 反応の予想
 - ア 語句、事柄の把握という面の抵抗は少ないだろう。
 - イ 面白さが様々なレベルであがるだろう。
 - ウ 僧都の言動に対して賛否両論があがるだろう。
 - エ 第二段落に評言がないことについての疑問があがるかもしれない。
 - オ 世の人々や兼好の評価について疑問があがるかもしれない。

第2次 [感想発表 → 学習課題の設定]

- ① 第1次の感想の集計一覧表を生徒に持たせ、それをもとにした話し合いの場を設定すること。

第3次 [文章の全体構造の把握]

- ① ワークシートの内容については、第2次の結果をもとにして、詳しいものにするか、おおまかなものにするかを考えること。
- ② ワークシートには、自分の思いとその身元を書くコーナーと、自由に自分の思いを書くコーナーを設問として設定しておくこと。

第4次 [印象の身元の話し合い]

- ① 第3次のワークシートの設問の集計一覧表を生徒に持たせること。
- ② 自分の思いの身元を語らせていくこと。
- ③ 世の人々と兼好の評言に目が向くようにすること。

第5次 [読后感想の文章化]

- ① 自分のとらえたこの話の面白さについて語らせること。
- ② 補助資料を作成して配布すること。

四 授業実践の梗概

1 各時間の学習過程

(1) 第一時間目の学習過程 (第1次)

- ① 学習理由の説明
 - 〈事前アンケートで「徒然草」に対する関心が高かったこと。〉
 - 〈三年生の古典学習の方向をつかんでほしいこと。〉
- ② 原文の範読 2回
 - 〈1回目は聞きながら、くぎれや振り仮名を適当にメモさせた。〉
 - 〈2回目は口語訳を見させながら聞かせた。〉
- ③ 教師一範読 → 生徒一音読 4回
 - 〈語の切れ目が意識しやすいように短くくぎって読むことから始め、くぎりかたを徐々に長くしていき、4回目は作品の構造に従ってくぎった読み方をした。〉
- ④ 発問 → 初発の感想メモ
 - ア「この話を読んでみてどんな印象を持ちましたか。またそのような印象を持ったのはどうしてですか。」

イ「盛親僧都という偉いお坊さんの話でしたが、どんなことが心に残りましたか。また、それはどうしてですか。」

感想集計結果とその考察

- ア・この話に対する印象を答える欄に、僧都に対する印象が多くあがってきている。
(僧都の個性の強さのためか?)
- イ・僧都に対する印象は、好感と反感の二つに大きく分かれている。
(変わった人だとのみとらえている者もいる。)
(それぞれのエピソードを、生き方としてとらえるか、単なる奇抜な行動としてとらえるかで違いがでてきているのか?)
- ウ・各エピソードへの注目度は、芋頭(第一段落)、日常生活(第三段落)しろうるり(第二段落)の順に高い。
・日常生活に注目している生徒に、僧都を「わがまま」ととらえる者が多い。「しろうるり」に注目している生徒は大変少ない。
・各エピソードに個別に注目している場合が多い。
(芋頭への注目度が高いのは、文章の分量の多さも関係しているかもしれない。)
- エ・僧都に対する世の人々の評価に注目している生徒は少ない。
- オ・僧都に対する兼好の評価に注目している生徒も少ない。
- カ・僧都の生き方にあこがれを持つ生徒ほど、文章全体に目が行き届いている。
・世の人々の評価までも読んでいる。
- キ・僧都の生き方がまかり通るような世の中と現代との相違に目を向けている生徒もいる。
- ク・「道心者」「徳」といった言葉への注目度は低い。
- ケ・殆どの生徒がこの話を面白そうだと感じている。

(2) 第二時間目の学習過程 (第2次)

- ① 音読 (作品の構造に従ってくぎった読み方で)
- ② 配布された感想集計表に目を通す。
- ③ 集計表を見てフリートーキング
- ④ 集計表を見ての気づきを書く。
- ⑤ 友達のを見て回りフリートーキング。
- ⑥ クラス全体で気づきをまとめ、今後の学習の方向を定める。
〈教師のまとめ〉…学習方向、学習課題の明確化のために…

「大部分の人は、この話の面白さを僧都の人柄や言動から感じとっているようだ。しかし、同じように面白いと思っているのに、僧都に対する印象は好感と反感の二つに大きく分かれてしまっている。一体どのような立場の違いがあるのだろうか。今後の学習の課題にしてみたい。また、この話の構成に目を向けている人は少ないようだ。次の時間では、この話を構成に注意しながらじっくり読んでみよう。」

第二時間目 板書記録

(生徒の発表のまとめ)

面白話

◇行動
 ・・・・ユニーク(しろうるり)
 ・・・・析はずれ

◇性格
 ・・・・身勝手
 ・・・・気まま・のんき

◇生き方
 ・・・・自由

◇話の構成
 ◇表現の仕方
 (人に食はすることなし)
 (ただひとりのみぞ)

◎ 僧都に対する印象

好感・十四名 ↑ ↓ 反感・六名
 *変わった人 五名

第三時間目 板書記録

(ワークシート問のまとめ)

面白さ

僧都に対する印象・・・○好感↑×反感
 (見出し)

【第二段落】

○・ユニーク、ユーモアのある、想像力豊かな僧都

→

×・無責任な、いかげんな僧都

◆・しろうるりとは ・変な僧都

【第三段落】

×・勝手な、いばっている僧都
 ←・世をかるく見ている僧都
 ←・世間並でない、世間離れた僧都
 ○・自由な僧都

◆・変わり者の僧都 ・僧都ののんきさ

使用したワークシート

国語科学習資料「盛親僧都の話」を読み味わうために

(1) この話の内容を大まかにどう覚えてみよう。

◎ 真実院に盛親僧都とて、やんごころなせ智者ありけり。

オ、a、b、cに入れたら良いと思ふよ。

部分と本文から書き出そう。

<p>作者(兼好)の評価</p>	<p>①</p> <p>○世をかるく思ひたる由者にて、よろづ自由にて、大方人に従ふといふ事なし。 ・お仕してら、こりうら食ひてらふとつにならて行きけり。 ・我が食ひたし時、夜中にも、晩にも食ひて、 ・ねがたければ、いかなる大事あれども、人の言ふ事聞かぬ。 ・目覚めぬれば、夜もいはず、心も澄まて、うすげきありきなど。</p> <p>評筆ならぬことなれど、</p>	<p>②</p> <p>(僧都)「この物も我も知らず。若しあらましかば、この僧の顔に似てん」と言ひける。</p> <p>(人)「とは、何物ぞ」と問ひければ、</p> <p>(僧都)「ある法師を見て、しろうるりといふ名をつけたりけり。」</p>	<p>大変に手頭が好きな僧都</p> <p>○手頭といふものを多く食ひけり。 ・談話の座にても、い、悪ふことあるには、く。 ・ただひとりのみや食ひける。 ・師匠、元には、錢二百貫と坊主とつまやがりたりけるを、買用に用ゐることなく、その錢みよになりにけり。(道産全部を手頭をかうのに使つてた)</p>	<p>盛親僧都の古動(全ソッド)</p> <p>a 世間の人々の評価</p>
------------------	---	---	--	--

(2) 完成したワークシートを見て、気付いたことや考えたことを書いてみよう。

(3) 疑問が浮き上ったところを書いてみよう。

(3) 第三時間目の学習過程 (第3次)

- ① 学習方向の確認
- ② 音読 1回 [文章全体の構造を意識したくぎり方で]
- ③ ワークシート説明。→作業 [空欄 a、b、c 及 ②、③ をうめる]
- ④ 確認 [空欄 a、b、c について発表]
- ⑤ 確認 [空欄 ②、③ について発表] <見出しを付けた理由も述べさせた>
<見出しの付け方にも僧都に対する思いが表れていること>
- ⑥ ワークシートの(2)の設問への回答
- ⑦ まとめ <次時の学習方向の予告>

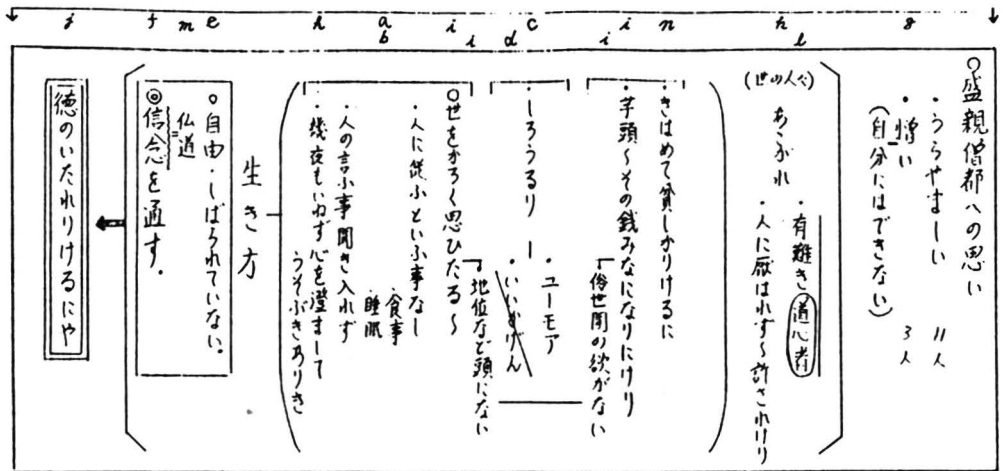
(4) 第四時間目の学習過程 (第4次) 授業記録の形で示すことにする。

10月18日(火) 第2校時
3年A組

教師の活動(発問を中心)

生徒の活動(発言の内容を中心)

<p>⑤ ① 僧都に反感を持っているという人に、その理由を聞いてみよう。</p> <p>② 反感と好感がまざっているという人に、その理由を聞いてみよう。</p> <p>③ 好感を持つという人に、その理由を聞いてみよう。</p> <p>④ 動物と同じという人について、その理由を聞いてみよう。</p> <p>⑤ いろいろなリウの後に、兼好のコメントを入れるとしたら、どんなものになりそうですか。</p>	<p>○集計表の内容と見方についての説明。 僧都への印象を自分の立場で語らせることを通して読みを深める。</p> <p>○説明を聞き、集計表の目を通す。 読みこんで内容が分かってくると、僧都の態度が真に入らなくなってきた。人の言う事を聞き入れない、従わないなど。 坊さんとして小まわらない行動から、例えは食事の時間を守らないとか、勝手に寝るとか、でも、いろいろなリとあだ名をつけたのは面白い。 いいから人にあだ名をつけたら面白くない。 反感を感じることが、小まわらないで自由に生きるところからは、反感を持つ。 たしかに勝手な生き方をしているが、自分の生き方、信念のようなのを通しているのかもしれない。 私は今、知られていないので、この僧都が自分に生きているのだから、少し先を越されたような気がして憎くもある。 自分とこのような本能、たまたま生き方をしている。 動物とあまり違わない、食事も、睡眠、たまたま何日も寝ずうたた寝があるところ、口は違う。 知性がある。(動物とは違うところは、いろいろある)。 大金をみんな手に使ってしまった。世をかくく見て拍はずれのことをしている。地位など頭になく、俗世間の欲がない。 人柄というものもある。 兼好の言葉の「徳」が小が至高の域に達していたとあるが、小が小にかかると、あか小が三百万のお金をみんな手頭に使ってしまった。道心というものも関係あるのかもしれない。 私道という信念を持っていた。僧侶であったから、みんなには、みんなユニークなユニークなユニークな人です。いいというものは(ほぼ全質賛成)</p>	<p>○人教調査 うらやまを感じている者、嫉妬心を感じている者</p>
--	---	---



(5) 第五時間目の学習過程 (第5次)

- ① 音読 [1回目、文章全体の構造を意識したくざり方で
[2回目、教師—口語訳→生徒—原文]
- ② 前時の確認 <前時に「この僧都は動物とは違う」としていた生徒に発表させ、この話についてのまとめをした。>
[発表内容 ・「本能のままに行動しているように見えるが、学識も知性もあるし、なによりも世間的な欲がない。」・「仏道という自分の進みたい道をまっとうしている。」]
- ③ 感想を書く <次の三つの項目について書かせた。>
 - 1 自分にとってのこの話の面白さ
 - 2 その他(気付き、疑問など)
 - 3 授業について

五 読后感想の集計とその考察

1(1) 「自分にとっての面白さ」の項で出された内容。

- ア 僧都の生き方へのあがれ、うらやましさ。
- イ 自分と僧都との比較。(生活、生き方 etc)
- ウ この話の時代と現代という時代の相違。
- エ 分からない、難しいということの面白さ。
- オ 僧都の行動が桁はずれであることの面白さ。

(2) 子ども達を感じとった面白さの身元

実際に出された子ども達の感想文は、左記(1)のア～オのうちのいくつかが混ざった形で

書かれているものが多かった。

アの「僧都の生き方へのあこがれやうらやましさ」は、イの「自分と僧都との比較」をその背景にして出て来ていると言えよう。なぜなら、現在の自分、あるいは自分が今おかれている状況を振り返り、そこを基準にすることで、対象に対する判断はなされるはずだからである。そう考えれば、子ども達は教材を読むことを、自己を読むことと並行させて行っていると言えるだろう。言い換えれば、教材と対峙しているとも言えるだろう。

教材と対峙した子ども達の目は、この話の時代と現代という時代の相違にまで届いて行く。左記のウはそのことを示していると考えられる。つまり、子ども達が感じた僧都へのあこがれは、時代の相違への注目をその身元としていると言ってよいと思う。

このことは、それぞれの時代の状況、その中でものの見方、考え方といったレベルでの「断絶」を「断絶」として、子ども達が子ども達なりにとらえたことを意味しているように思う。エの「分からない、難しい」といった感想も、このことを背景にして出てきていると考えられる。そして、それらを「面白い」ととらえるところに、子ども達が本来持っているエネルギーのようなものが感じられる。

2(1) その他（気付き、疑問）の項で出された内容。

- ア 「徳」「道心」という言葉の内容が分からない。(一番多かった疑問)
- イ なぜ世の人々に嫌われなかったのか、いまだに分からない。
- ウ 「徳のいたれりけるにや」と兼好が言い切らないのがひっかかる。
- エ 兼好はなぜこの僧都を高く評価したのか。
- オ なぜ兼好はこの僧都のことを書いたのか。

(2) 子ども達が出してきた疑問の身元

「なぜ僧都は嫌われないのか。」という問題に取り組んだときに、子ども達は「徳」「道心」という言葉に注目し、辞書でその意味を調べて盛んに話し合っていた。言うまでもなく、この二つの言葉は、僧都の言動および、それに対する世の人々と兼好の評価を支えるキーワードである。

これらのことから、子ども達は、言葉の辞書的な意味を知っており、更にはこの話の構造もとらえていたことが分かる。それでもなお、アの「言葉の内容が分からない。」という疑問が出されている。この疑問はどのようなことを意味しているのだろうか。

ここで子ども達が直面している問題は、おそらく、それぞれの時代をその背景に持つ言葉のレベルでの「断絶」だと思う。なぜなら、「徳」「道心」などという言葉は辞書にはあっても、その内容は現代生活では殆ど死語に近いものになってしまっていると思うからである。子ども達は、自分達とは異質の世界に言葉のレベルで向かい合っているとも言えるだろう。

以上のことから、アの疑問の背景としては、子ども達が言葉のレベルでの「断絶」を認識したということが考えられるだろう。イの疑問もこれに準じて考えてよいように思う。

エ、オの疑問からは、子ども達が第六十段の話の突き抜けて、作者兼好までも読み抜こうとするエネルギーを持っていることがうかがえる。

これまでの考察からすれば、「断絶」を「断絶」としてとらえたことが、言い換えれば「分からなさ」「難しさ」に到達したことが、このエネルギーを生み出したのだと言える

だろう。そして、そのエネルギーの源は「分からなさ」「難しさ」を「面白い」と感じ得る力にあるように思える。また、そのような力は子どもであれば誰もみな持っているものであると思う。

疑問のウは、「断絶」の認識から生ずるエネルギーが、作者兼好の方向へ向かって行こうとする、ちょうどその入り口のような微妙なところに位置しているように思える。

3(1) 授業についての感想の項で出された内容。

- ア ・ 古典を好きになった。 ・ 古典にますます興味をもった。
・ 古典を楽しめた。 ・ 古典には味がある。
・ 読めば読むほど面白くなるのが古典だ。
- イ ・ 「徒然草」の他の話もやりたい。
・ 違うパターンの古典もやりたい。
- ウ ・ 音読を繰り返しやったのがよかった。
- エ ・ ワークシートをやったのがよかった。
- オ ・ プリントで他の人の意見や見方がよく分かったのがよかった。
・ 隣の組の人の意見も知りたかった。
・ ○○派、××派に分かれて討論会などをしてみたかった。
- カ ・ 授業の進め方（ペース）がよかった。

(2) 子ども達が出した授業についての感想の身元

ア、イからは、子ども達の古典に対する興味の程がうかがえる。前述の考察からすれば、子ども達が古典に興味を持つ所以は、単なる面白さだけではないことは明らかだろう。子ども達は古典にふれることで、自分達とは「断絶」した部分のある世界、異質な世界を垣間見ることに興味を覚えたのだと思う。そして、それが自分自身の世界を省みることにつながっていくというところに意義を見いだしているように思える。

このことから、子ども達は、自分の体重をかけるだけの価値あるものを、思わず対峙してしまうような魅力が発見できるものを、教材として求めていると言えるだろう。

ウからは、古典学習の最も基本的かつ重要な学習法である音読の意義を、子ども達が見いだしたということがうかがえる。

エからは、子ども達が、作品をまるごと読むこと（構造をつかむこと）の重要性を意識したことがうかがえる。

オにあるそれぞれの内容が示唆していることは重要だと思う。簡潔に言えば、「子ども達はお互いにコミュニケーションを持ちたがっている」ということを示していると言えるだろう。人の意見やもの見方を知りたがり、さらには人と意見を戦わせたがっていることからすれば、そうすることの意義やメリットに子ども達はすでに気付いているのだと考えてよいと思う。

カは、子ども達にとっての学習のペースを教師がつかんでいくことの重要性と、そのため様々な方法開発の必要性を示唆している。子ども達にとって価値のある教材を開発していくことと並ぶ、重要な問題を指摘しているものだと思う。

おわりに (国際理解教育における古典教育の位置)

自国の文化を大切にするとともに、諸外国の様々な異なった文化も尊重し、協調性を持って国際社会の中で生きて行ける人間を育成する。

このようなところに国際理解教育の目標があるとすれば、そこで必要とされる資質は、他との「同質性」や「連続」を安易に求めるような曖昧な妥協性ではないだろう。

本多勝一氏は、「民族と文化」(注4)の中で、次のような指摘をしておられる。「民族が違えば、ものの考え方もこのように違う。それは日本とアラブと『どちらが良い(あるいは悪い)』ということではなく、『違う』という事実が重要なのである。」

国際理解教育の目標および本多氏の指摘からすれば、国際社会で生きて行こうとする人間に必要な資質として、次のようなものが考えられる。

異質なものに対する興味。異質さを見抜く目。比較の基準となる自己を厳しく見つめ、そこから自己との相違を見いだそうとする態度。そしてなによりも重要なのは、そうしてとらえた「異質性」を「異質性」として(「断絶」を「断絶」として)認めるという率直な態度。

このように考えると、「連続」と「断絶」の二面性をその特質として持っている「古典」での教育のひとつの方向と、国際理解教育における古典教育の位置およびその重要性も浮かび上がってくるように思う。

※ この小論は、1988年11月の第17回全日本中学校国語教育研究大会(熊本大会)における、口頭発表とその後使用した参考資料に加除修正を加え、論文の体裁に整えたものである。

引用文献目録

- | | | | | |
|----|---------------------|--------------|------------|---------|
| 注1 | 第十七回 全日本中学校国語教育研究大会 | 熊本大会 | 大会要項 | 1988/11 |
| 注2 | 現代語訳対照「徒然草」 | 安良岡康作 | 訳注 旺文社 | 1988/ 4 |
| 注3 | 「徒然草」 | 『日本古典文学全集27』 | 小学館 | 1971/ 8 |
| 注4 | 「民族と文化」 | 本多勝一 著 | 『国語3』 光村図書 | 1981/ 2 |

参考文献目録

- | | | | | | |
|----|-----------------|----------|----------------|---------------------|---------|
| 1 | 日本古典文学全集 | 27 | ～「徒然草」 | 小学館 | 1971/ 8 |
| 2 | 現代語訳対照「徒然草」 | 安良岡康作 | 訳注 旺文社 | 1988/ 4 | |
| 3 | 鑑賞日本古典文学 | 18 | ～方丈記・徒然草 | 角川書店 | 1975/ 4 |
| 4 | 「俗と無常」－徒然草の世界－ | 上田三四二 | 著 講談社 | 1976/ 3 | |
| 5 | 「文芸作品研究法」 | 安良岡康作 | 著 笠間叢書74 | 1977/ 2 | |
| 6 | 西尾実国語教育全集 第九卷 | 古典の研究と教育 | 教育出版 | 1976/ 5 | |
| 7 | 増淵恒吉国語教育論集 上巻 | 古典教育論 | 有精堂 | 1981/ 2 | |
| 8 | 西郷竹彦文芸教育著作集 10 | 古典文芸の世界 | 明治図書 | 1981/10 | |
| 9 | 教材研究講座「徒然草」1～12 | 三木紀人 著 | 月刊国語教育 | 1982 1月号～12月号
連載 | |
| 10 | 『古典で何を教えるか』 | | 月刊国語教育1982 4月号 | 特集 | |

- 11 『新しい古典教育をひらく』
- 12 『古典入門期における創意と工夫』
- 13 『新しい古典指導の方法』
- 14 『「徒然草」その魅力の再発見』

月刊国語教育1982 6月号 特集

月刊国語教育1984 4月号 特集

月刊国語教育1987 8月号 特集

月刊国語教育1988 5月号 特集

以上9～14 東京法令出版